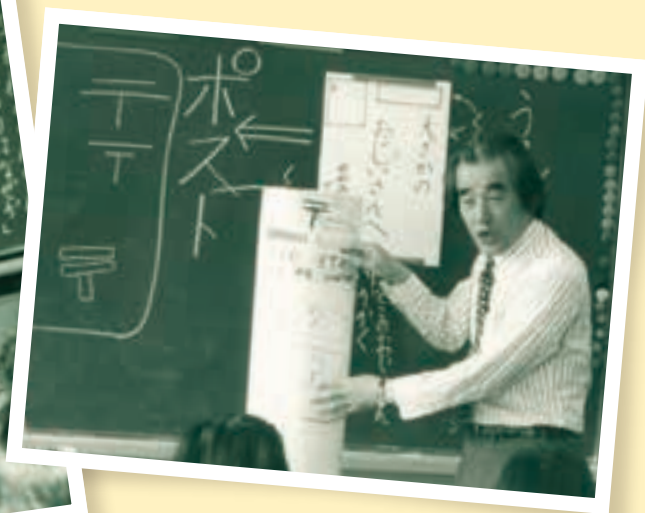


# まなびと学



## もくじ

### 特集 有田和正先生から学んだこと

対談 追究し続ける子どもの育て方.....	3
有田和正先生の実践を学ぶ.....	11
有田和正実践の今日的意義.....	13
社会科授業をユニバーサルデザイン化する.....	15
<b>実践紹介</b>	
学校の歴史資料室をつくろう大作戦 ～横浜市歴史博物館の取り組みから～ .....	18

# 有田和正 先生から 学んだこと

去る5月2日、<sup>ありた かずまさ</sup>有田和正先生が逝去されました。先生は1935（昭和10）年に福岡県に生まれ、福岡教育大学附属小倉小学校、筑波大学附属小学校などで社会科を中心に指導にあたられました。そのうち、愛知教育大学、東北福祉大学で教材の開発・研究や後進の育成などに携わってこられました。

『小学社会』（教育出版）の著作者としての30余年にわたる教科書づくりでは、子どもの実態にそくした思考の流れを重視する問題解決的な学習展開や、追究する楽しさを味わえる教材の提示といったコンセプトの確立に役割を果たされました。

本号は追悼特集として、「追究の鬼」の育成に努められた教師時代ご自身がふり返った対談（本誌バックナンバー掲載）を再掲するとともに、有田実践の意義や神髓について、ゆかりの方々からご寄稿をいただきます。

## 有田和正先生に学ぶ—有田実践の神髓—

最近、「R」→P→D→C→Aの主張を見かけるようになってきた。「R」は、リサーチ・「実態調査」である。私には、最近しばしば見かける「子どもの実態把握」のない学習指導案や授業実践への警鐘のように見える。教育は、「子どもの実態把握」から始まり、「子どもの実態把握」で終わることは言うまでもない。この「子どもの実態把握」に早くから徹底的にこだわってきたのが有田先生である。

先生がしばしば口にされていた言葉が、「（教師の）教えたことを、（子どもの）学びたいことに転換する」ということであった。子どもの強く興味をひく教材を用意し（＝「R」）、そこから強い問題意識をもたせる。追究の価値のある問題が設定できたら、問題解決の7割は達成されたも同じである。今日の教育課題・学力観の「生きる力」そのものであり、突き詰めると、子どもを「追究の鬼」にすることである。先生は「教材七分に腕三分」ともよく言われた。とにかく、子どもを強く惹き付け、強い問題意識をもたせる教材開発こそ良い授業の「要」と考えてのことである。「子どもの視点からの教材開発」こそ、良い授業の終結点との主張である。有田実践に学ぶ要点であり、神髓である。

東京学芸大学非常勤講師 <sup>なみ いわお</sup> 波 巖

## 「追究の鬼」の育て方に学んで

小学校社会科の授業実践を研究する者で、知らぬ人のいない憧れの人。それが有田和正先生だ。私も有田先生に憧れた一人である。小学校教師になりたてのころ、先生が書かれた本をむさぼるように読んだ。「追究の鬼」を育てるにはどうしたらよいのか？ どう実践すれば、我がクラスの子どもたちも有田学級の子どもたちのように「はてな？ 帳」を書いてくれるのか？

憧れの有田先生と対談させていただく機会を得て、積年の疑問をぶつけてみた。有田学級の子どもが「読める」「書ける」ようになるのはなぜなのか？ 有田先生が読み聞かせをされていたり、速読を教えられていたりといったことは、この対談で初めて知ったことだった。そのころ、子どもに情報リテラシーを育てることによって、自分なりの「追究の鬼」を育てる勘どころを手に入れようとしていた私は、有田先生のお話で大変意を強くして、子どもたちに読書を勧め図書館を活用した調べる学習に一層力を入れていった。

対談は宝物のような時間だった。子どもたちのことを思い出しながら、楽しそうに語っておられた有田先生の穏やかな笑顔は忘れられない。

帝京大学教授 <sup>かまた かずひろ</sup> 鎌田 和宏

対談

(2006年6月)

# 追究し続ける 子どもの育て方

有田 和正 東北福祉大学教授(当時)

鎌田 和宏 東京学芸大学附属世田谷小学校(当時)



## 印象に残る「追究の鬼」のすがた

鎌田 教師になりたての頃にたくさん読んだのが、有田先生のご著書でした。その中で「追究の鬼」というのがキーワードになっていて、よく調べる子どもたちの姿がたくさん描かれています。「こんなことも調べられるようになるのか」と驚かされますが、これまでに先生が担当されたクラスの中から、印象に残る何人かを紹介していただけますか。

有田 一人は、前川君でしょうか。前川君は、4・5年生のときには芽が出なかった。ただよかったのは、彼は私が推薦した本をかたっぱしから読んでいった。5年生のときには、大人が読むような歴史の本も読んでいましたよ。そして6年生になって歴史が始まったら、他の子どもとは桁違いの文章を書くようになった。この子どもが授業中に発表する内容を、他の子どもは理解することができない。その知識はどこで培ったかという、読書でしょう。

子どもは「らせん状」に伸びていくとか、自然に「斜め」に伸びていくとかいうが必ずしもそうではなくて、這い回る期間があって、その期間が長いほど、バツと大きく伸びる。そのことを示したのが、この前川君です。彼の文章はどこが違うかということ、全部生活に結びつけている、ということ。例えば、大手自動車メーカーに勤めていた彼のお兄さんに対して、お父さんが「日本の自動車産業が世界一になったのは、なぜだと思うか」と尋ねると、「ラインで働く人たちの力だ」と言うわけです。彼らは教育程度が高い、だから外国ではできないような自動車ができる、社員の

力によって日本の自動車メーカーが世界一になったんだ、と話をします。そのやりとりを聞いていた前川君は、「江戸幕府においても農民に支えられて武士の生活が成り立っている。自動車会社も社員によって成り立っている。まったく一緒じゃないか」と、ハッと気づくわけです。身近な話をすぐに学習したと結びつけて、自分の生活の中に学習内容を引き込むことができる。これは「追究の鬼」の特徴です。自分の「土俵」をもって、その中にいろいろな話を引き込むことができるわけです。だから考えることが非常に具体的で、相手に対して説得力がある。

それから、私が最初に受けもった船曳君も印象に残っています。非常に思慮深い子どもで、自分の論理をじっくりと築いて行って、人の意見をよく聞いたうえで自分の意見を言うタイプでした。

船曳君が6年生のときに初めて「一寸法師」の単元を開発して、授業公開の研究会でやりました。そのときにある子どもが「一寸法師がのぼった川は何という川ですか」と質問をした。みんなで地図帳を開いて「淀川ではないか」「いや鴨川ではないか」などと意見を述べ合っていたのですが、船曳君が「ぼくの考えはみんなとは少し違う。ここでいう『川』は、本当の川ではないのだ。一寸法師がのぼった川というのは『時流』、つまり『時の流れ』なのだ。一寸法師は『時の流れ』に乗ったからこそ出世することができたのだ。だから現実の地図帳を探さなんてナンセンスだ」と言ったのです。私はいまだにその発言を覚えています。ちょっと桁が違う発言ですね。この子どもは最初には発言しない。みんなの意見をずっと聞いていて、最後に手をあげるの

です。これがまた効くんですね。

**鎌田** 逆転というのは一番効きますね。

**有田** どこで自分が発言するべきかをよく知っている。いつも私はやられていました。

もう一人あげるとすれば、私が大学に赴任する直前に担任した1年生の山崎君です。この子どもが書く文章はとてもユーモアがありました。ものの見方が独特で、どうしたらこのような見方ができるのかというものでした。それは、もともとこの子どもがもっていた力なのだろうと思うけれど、私が教えている間にその力が発揮されてきたのですね。

そして何がすごいかというと、必ずそこに問題がもてるということです。「なぜか」ということを考えられるということです。この子どもは、2月の終わりに次のような文章を書いています。「いろいろなお店の春を調べてまわったのでございます。①スーパーマーケットの春。小豆やおでんは仕入れを減らして、菜の花、つくし、ふきのとう、たらのめ、うどなどの野菜が出てくるそうです。つくしを食べるのにはびっくり。菜の花の種からサラダ油がとれるのも、おどろき、梅の木、桜の木でござんす。②薬屋さんの春。春になると花粉症の人のためにマスク、目薬、花粉症の薬が棚に並べられるそうです。また春にはよく喉が渴くので、栄養ドリンクの大きなビンがよく売れるそうです。ついでにはばくもスーパードリンク・リポビ

タン小児用を飲んで、さあ次の店へ。③パン屋さんの春。一年じゅう変わらないそうです。春は来ない、客も来ない、かわいそうなパン屋でございました。④資生堂の春。春の光は心まで美人にするので、薄化粧がよろしいそうです。口紅は明るい色をお勧めします、とお姉さんは言いました。さっそく一本買って塗って喜んでいる母でございました。母の春は口から始まるのである。」

**鎌田** 1年生の文章ではないですね。

**有田** この子どもの文章は、ちょっとユーモアがあって知的ですね。これは学校で「自然の春探し」をやったときに、家庭学習として取り組んだ「店の春探し」のまとめの文章なのですが、ここには「視点の転換」がありますね。「追究の鬼」は、自分で視点を変えて調べることができる、そういう能力がなくてはだめです。言われたことを、言われただけやるというのでは発展性がないですよ。調べ方も多様です。尋ねることもあるし、実際に見に行くこともあるし、電車の中で他人から聞いたことを物語に仕上げたりすることもある。この子どもは、1年生とは思えないような多様な調べ方をしています。

「追究の鬼」を育てるときには、「もう少しで鬼になるな」という頃に「そろそろ鬼らしくなってきたな、鬼にしようかな…」と本人に言うと、その言葉でハッスルしてもっと調べるようになる。私は、教育においては「暗示」は非常に大切だと思う。教師が一人一人の子どもに、その子どもにマッチした「暗示」を上手くかけることができるかという、そういう教育技術の粋だと思いますね。

## 子どもは「学級の力」で育つ

**鎌田** 今、「鬼にしようかな…」というお話がありました。先生のご著書では教材開発の話は丁寧に書かれていて、「こうやってやればいいんだな」というのが見通せるのですが、子どもが「追究の鬼」になっていくまでの先生の鍛え方というのは、私にはなかなか難しいなと感じています。最初にやらなければならないのは、先生もご著書





に書かれているとおり「子どもをどう育てるか」ということだと思うのですが…。

**有田** 一つは、学級を育てなければならぬと思いますね。一人の子どもを育てるためには、「学級の力」がものすごく大きい。学級というのは三つの条件で成り立っています。「助け合い」「磨き合い」そしてもう一つは「牽制し合い」。これは、なにか悪いことをしていたら「おい、やめろよ」と注意し合うことができる関係です。この三つの条件のある学級をまず育てることが大切なんです。そのような学級の中からは、「この子どもを育てたらいいな」という、ポイントとなるような子どもが出てきますよ。そうしたら、まず一人を徹底的に育てる。一人を育てると、おかしなもので必ず三人は育ちます。二人育てれば六人育つ。つまり全員育てる必要はないのです。そのことがわかってきた。だから、まず学級づくりに力を入れました。

### 「よい学級」は授業を通してつくる

**有田** 「よい学級」というのは学級会の話し合いでできるかといえばそうではない。では、どうすればよいのかというと、「よい授業をする」ということです。子どもがびっくりするような授業をする。今、授業で求められているのは、教科書をきっちりと教えることです。教科書は基礎・基本で、学習指導要領を具現しているわけですから、

それをわかりやすく教える。それにプラス「サプライズ」です。つまり教科書を教えるときに、子どもたちをワクワクドキドキさせ、驚きを与えることができるかどうか教師には問われているのです。平凡な文章で書いてあってたいしたことはないと思いがちな教科書が、実は面白いんだ、と子どもたちが感じるのが大切です。

学級会などの話し合いで、学級をつくろうとしている先生もいますが、それでは凝集性は深まらない。高め合いや磨き合い、助け合いは、授業の中でしか育たないわけです。「学級づくりがうまくいっていない」「荒れた学級でよい授業はできない」と言うかもしれないが、荒れた学級でこそ、よい授業をしないといけない。どんな子どもでも、ちゃんと知的好奇心がある。面白い教材を出せば、食い下がってくる。私は、人間というものを信頼しています。教科書を使う場合でも、教科書に何を入れてハプニングを起こすか、起爆剤になるものを加味するんですよ。

**鎌田** 先生のご著書を読んでいた頃は、「おそらく有田先生は、グラフなどを読ませる前に、周到にグラフの読み方の指導をされているのだろう」と思っていました。いきなりこのような発言は出ないから、その前の時間にグラフの読み方や比較の仕方の指導をされているはずだと思っていたんです。

でも、今のお話を聞いて、それは違うということがわかりました。クラスに一人か二人は、そう

どんな子どもでも、  
ちゃんと知的好奇心がある。  
面白い教材を出せば、食い下がってくる。  
私は、人間というものを信頼しています。

——有田先生



いうところを見てハッと気がつく子どもがいますよね。その子を上手に育てながら、周りを引き上げ、その子にふさわしい集団になっていくというところを大切にされている。だから、初めて授業をされるクラスでも、資料からいろいろなことを読み取れる子どもたちが出てくるのかな、と思いました。

**有田** そのとおりです。そういう子が出てきて、面白いグラフの読み方をするでしょう。そうしたら、「すごいね、そんな読み方、先生も知らなかったな。もっと他に上手い読み方があるかもしれないなあ」と子どもの方から聞き出してみる。そうやって、グラフの読み方の基礎・基本をつくっていくんです。ある子が出てくるのをきっかけに、他の子と噛み合わせて、磨き合わせて、ある形をつくっていく。そうすると、統計・グラフを読むときには、まず題を読む、年度・出典を読む、縦軸・横軸を読む、中の変化を読む、そして変化の大きいところの理由を考える、というこの五つが自然に出てくる。

**鎌田** それを先に教えてしまうと、そういう盛り上がる授業はできないですよ。

**有田** そう、それをつくっていく過程が、教育ですよ。

## 子どもを見るセンスを磨く

**鎌田** ただ、そうやって先生の実践を真似して工夫をして、一人ぐらいいろんな子が出たとしても、その後どういう意見が出てくるのか、という見通しを教師がしっかりもっていないと、子どもたちの意見は評価できませんよね。先生はそのあたりのポイントを捉えられるのが、教材の構造からも明確ですし、大先輩に対してこんな言い方をするのは失礼なのですが、「鼻が利く」のかな、と思ったんですよ。

**有田** 鼻が利く、ねえ（笑）。そういうセンスを磨くことは大切です。私は年間30回くらい飛び込みで授業をしますが、始めの5分間に、どういう学級か、どこから攻めようか、鼻を利かせる。

挨拶をして、子どもの視線が全部ぱっと私に集まってくるようなときは、最高度の発問をするし、目を逸らすときは、違う攻め方をする。資料はもう変えられませんか、同じ資料でも発問は五つも六つも考えていきます。そのあたりを嗅ぎ分けるには、鼻が利かなきゃいけない。

最近の教師は、自分のクラスをずっともっていても、鼻が利かなくなっている。授業を見にいくと、教室の右側の方が視野に入っていなかったり、前の方が見えていなかったりと、視野に癖がある。私は、若い頃、先輩から「右の隅が見えていない。その癖をなくさないと、全部の子どもが見えないからいい授業ができない」と言われて、今でもその言葉が焼きついていますね。だから、他の教師の授業を見ると必ず、目線を見ています。誰でも癖がありますから、自分の癖を早くつかんで、それを克服すればいいわけですよ。40人いて一人でも見えなかったら、担任としては、だめなんですよ。なかなか見えないけれど、そこが非常に大事だと思いますね。

## 「追究の鬼」を育てる教材開発

**有田** 「追究の鬼」というのは結局、学級づくりと、子どもが追究したくなる教材、それに面白い発問、これに尽きますね。面白くない教材だったら、追究しないじゃないですか。

**鎌田** 今の子どもはもっと楽で面白いことが山ほどありますからね。そういうことを全部乗り越えてでも面白いと思えるというのは、高度な面白さだと思いますし、それに気づけるということがすごいことですよ。

**有田** 私は教材開発に命を懸けているけれども、実は教材そのものにこだわっているのではなく、「追究の鬼」といわれるような、生涯にわたって自分の知的好奇心を満足させることを楽しめる子どもを育てたいわけです。子どもが大きくなっても、「調べるのが楽しい」「追究するのが楽しい」と思う、それが「生きる力」だと私は思うのですが、そのために教材を開発している。

もう一つ、私が教材開発に力を入れた理由としては、教科書の著者になったということがあります。教科書の中に新しい教材を入れたい、それには、実践して、可能性があるというものじゃないと入れられないし、編集会議で皆さんが納得しないでしょう。実践して、子どもがのってきて、「うん、これはいい」と思える教材を教科書に入れたいという意欲がありました。

私は、社会科の教材開発は、社会科のものをしながらやってはいません。大体違うものを読んで、違う分野から見て教材開発をする。真正面から攻めていっても案外わからないけれど、ちょっと違った角度で、脇の方から攻めていくと、見えてくるものがありますね。

### 「地域を変えていく」社会科をめざす

**有田** 私の家のそばに矢沢川という川が流れていて、樹齢70年にもなる桜の木が26本あるのですが、今日、出かけようとしたら、その枝をバサバサ切っているんですよ。聞くと、「今度、川の工事をするために切っている」という。「道の方は関係ないじゃないか」と言っても「命令されたとおりにやっているだけなので、こちらに言われても困る」という。それで役所に電話をかけて、「まちの景観が壊れる。どういう考えでやっているのか。」と尋ねました。

私は、これが社会科だと思う。社会科の学習と

いうのは、自分の住んでいる地域を改革していくもので、そういうエネルギーが、子どもにも影響すると思いますよ。

**鎌田** 教師自身がそうしているという話はなかなか聞かないですよ。

**有田** 自分が率先してやらなければ、教えられません。一度木を切ったら、もとに戻るのには70年かかる。その間に私は死ぬけれども、子孫に何を残すか、どういう景観や価値を残すか、ということではないでしょうか。社会科はやはり社会を改造するというか、活動しなければならないと思います。社会科というのはソーシャルスタディーズで、ソーシャルサイエンスではないですよ。今やっているのは、ソーシャルサイエンスで、それは頭の中だけでやる科学になっていますが、私は、体を張ってやるソーシャルスタディーズをめざしているのです。

世田谷区に21箇所あった区の出張所が7つの支所に統合されるときも、高齢者にとって不便なまちになると猛烈に反対の取り組みをやりました。私はけんかをしようという気はないけれど、やっぱり民主主義ですからね。住みよいまちをつくるというのが民主主義じゃないですか。みんなでよいまちをつくるのが我々の仕事だし、子孫のためでしょう。それを考えましょうということですよ。役所はお金がないということの一点張りですが。

子どもが大きくなっても、  
「調べるのが楽しい」  
「追究するのが楽しい」と思う、  
それが「生きる力」だと私は思う。

——有田先生





**鎌田** お金がないと言いますけれど、そのお金を出しているのは住民ですよ。自分たちが出したお金の使い方、意に沿わないことがあれば主張するのは、当然のことのはずです。でも、我々日本人はそのあたりが弱いですね。

**有田** 今の教師の弱さは、そういう実績がないということですよ。身のまわりを見て、活動していくのが生きた社会科ですし、子どもにもそういうエネルギーを育てたいわけです。社会科が難しいと感じている教師も、自分でやってみれば、そんなに難しいことではないですよ。

## 社会科はつまらない？難しい？

**鎌田** ただ、一つ「よくないな」と思っているのは、社会科のよいイメージというか、「こういう授業がよい授業だ」というイメージがないのです。大学でもときどき授業をしますが、「社会科は好きですか嫌いですか」「社会科のよい授業と悪い授業を一つずつあげてください」と聞くと、よい授業というのはなかなかあがらない。1時間ずっと白地図を塗りつぶしてなぜこんなことをするのかわからなかったとか、年表を丸暗記させられたとか、そういう悪いイメージの方が圧倒的に多くて、楽しい授業、面白い授業を経験している学生が少ないのです。これでは、子どもたちに楽しい思いをさせてやりたい、燃える授業をしたいと思っても、教師自身がそういう授業のイメージがもてません。

**有田** 社会科が難しいという教師に私がまず言いたいのは、教科書をもうちょっと使った授業をやってほしいということです。教科書を20回読まなければだめです。私なんか30回40回読んで、自分が授業したページは全部そらで言えますよ。そのくらい読み込むと、何をおさえるべきかということがわかる。資料の見方のポイントとなるものが見えてくる。教科書を自分のものにするということです。そのためには、自分の教科書の中に書き込むことです。私が授業をするときは、書き込むだけじゃなくて考えを書き込んだ紙を何箇

所も貼りつけて折り込んでいますよ。その教科書のコピーが欲しいと言われることもありますが、それは企業秘密でね(笑)。でも、若い教師には、どういうふうになんか書いてあるか、ポイントを見せませよ。線を引っ張ったり矢印をつけたり、いろんなことをやっています。しっかり読んで、教科書を自分のものにしたなら、教科書「を」教えたとしても、自分の意志が入っているでしょう。そういう社会科にすれば、その教師らしい個性あふれる社会科ができると思います。だから、教科書の中に書き込んでください。大事な箇所に印をつけるだけでも違う。

**鎌田** 印をつけられるかどうか、書けるかどうかということも問題ですね。つけた箇所が見当違いということもありますし。私も、大学の授業では、「教科書の読み方」も教えていて、授業をするためには、教科書をこんなふう読んで、こんな発問をつくらうとか、ここが資料の使いどころだとかという話をするのですが、教科書をどう読むかを教わる機会がないというのが現状ではないでしょうか。

**有田** 社会科の資料が「見える」ためには、基本的な知識が必要です。社会科において掛け算九九にあたるのは何かというと、まずは県名だと私は思う。47都道府県名が4年生できちっと言えるようにならないと、社会科にならない。2年生で掛け算九九がわからなかったら、算数にならないでしょう？それと同じです。県名とか用語とか、そういう基礎的な知識をきちっと知っておかないと、絵が読めない、資料が読めない、だから面白くない。

あと、地図を見るときは、北を上に見る癖がついていますが、私は地図帳をひっくり返して「北から見ろ」と言ったりします。そうすると、「先生、日本が違って見える」と。そういう発想の転換をやらないと、一方だけからしか見えない。教師の頭をもう少し柔らかくすることが必要だと思います。

**鎌田** 発想の転換というのは、いきなりできることではないですよ。さかさまに見るといのは、実はさかさまに見た人がいることを知っていて、その人の学んだあとをなぞっていかないと、なか



なかできないのではないのでしょうか。先生が、ジャンルが違う本をたくさん読まれているというのは、社会的ではない発想の人の話をたくさん聞くことによって、発想の方法のポイントをつかまれているのでしょうかね。

**有田** なるほど。私は、自分が学んだことを子どもと一緒に追究しましたよ。例えば、6年生の子どもに、安藤広重の「東海道五十三次」の絵を全部見せてね、「この中の旅人が何を食べているか、食べ物だけを探せ」とやった授業は面白かったですよ。こんな発想ないでしょうか？食べ物に俄然興味をもちますよ。

**鎌田** 先生は、「子どもの側に立った教材開発」ということを一貫しておっしゃっていますよね。子どもの目から見たら、まずは「何を食べているんだろう」ということを知りたいだろう、と。ふつう社会科の教師は考えないことでも、有田先生は、そのような教材によって子どもが動き、動くことによって何か社会の摂理を見つけてくるだろうという確信があるから、できるのかなと感じました。

教科書を面白いと思う人は、なかなかいませんね。「教科書を使った授業はつまらない」という変なイメージがあるのだと思います。熱心な教師は教科書を使わないとか、独自の編成の方が優れているといったようなイメージがありますよね。でも、私はそうではないと思います。先生のお話にあったように、教科書を使った面白い授業は絶

対ある。その面白さに気づくチャンスがないということが、やはり大きいのではないのでしょうか。

**有田** 社会科が苦手という背景には、教え方が難しいということはあると思いますが、やはり社会科に関する知識が少なすぎると思うんですよ。今の若い人たちは知識が多いというけれど、社会科に関しては多いとはいえませんね。

社会科の授業で、何か面白いことをいっぺんやったら、やみつきになると思う。面白い授業を1時間やったら、ころっと変わりますよ。そのためにはどうするかというと、追試をするんです。例えば、私は自分の授業について発問とか記録をちゃんと書き残していますから、それを試してみることです。そのとおりにやってみると、「そうか、こういう教材を使ってこういう発問をするとこういう授業になるんだな」ということが体得できる。頭でわかっているけど、体得しなければだめです。私自身も、面白い授業を見たらすぐ追試してみますよ。たくさん授業を見ていますから、いいところがあれば盗んで、自分のものにする。

学ぶということは「真似る」こと。真似ることを嫌う人は伸びません。結局、授業を見る眼がないと、いい授業はできない。授業が下手な人は、授業を見る眼がないのです。

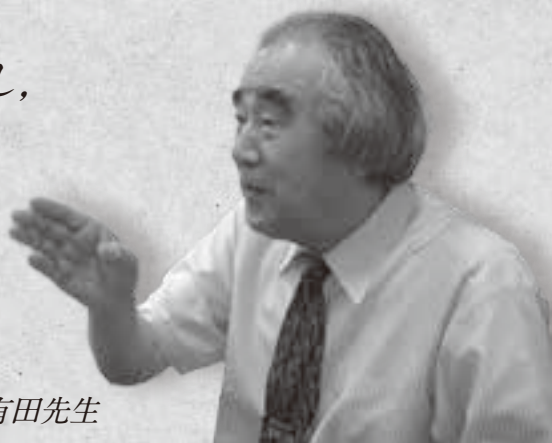
### 「読み書きの力」を鍛える

**鎌田** 先生は読み書きの力をすごく大切にされて

身のまわりを見て、  
活動していくのが生きた社会科ですし、  
子どもにもそういうエネルギーを  
育てたいわけです。

学ぶということは「真似る」こと。  
真似ることを嫌う人は伸びません。

——有田先生



いて、ご著書にも「本を読まない子はだめだ、本を読まない教師はだめだ」とお書きになっていらっしゃると思います。私も同感なのですが、「読み書きの鍛え方」、特に、「読む」ことについては、先生はどのように育てられたのですか。

**有田** 子どもが「読む」ようにするしかけは、私は読み聞かせからです。どんなクラスでも、最初にしっかりと読み聞かせをやりましたよ。今でも印象に残っているのは、4年生をもったとき、本をまったく読まないクラスだったんです。そこで私は『80日間世界一周』を毎朝10分間読んで聞かせて、「次はどうなるだろうなあ」というところで切るんですよ。そういう面白いところで切ったら期待感をもつでしょ。そのうち子どもたちが「先生、こんな本もっと読みたい」って言い出したんです。じゃあ読書の時間をつくろう、と。国語の時間のうち1時間を読書の時間にして、図書室に連れて行って、どこにどんな本があるかを紹介して、1時間好きなように読ませました。慣れてきたら、「4年生にもなって、もっと速く読めなくてどうするか」ってハツパをかけてね、上の方の2、3字だけさーっと読んで意味をつかむ練習もさせましたよ。そうすると、4年生の後半になって、朝学校へ来るときに1冊、帰りに1冊、1日2冊本を読むようになりました。

本を読むことは、子どもたちの知識や好奇心を増やすことにもすごくつながります。社会科はずそ野が広いでしょう。すそ野を広げないと、社会科の授業はうまくいかないのではないのでしょうか。

「書く」ことは、まず学級通信を黒板に書いて、子どもたちに写させました。明日持ってくるものとか、家庭への連絡とか、必ず2ページ以上になるくらい、1年生から書かせていました。学校からの保護者会の通知なども、配らないで、全部黒板に書いて写させる。書いたら持ってこさせて、私が見て判を押して持ち帰らせる。子どもたちは時間を書き間違えたりするわけですが、判を押すときに気づいても、直さないでそのまま返します。そうすると、時間や日にちを間違えて来た保護者

が、「なぜ先生は直してくれなかったんですか」と言いますが、「私が訂正したら、いいかげんに書いても先生が訂正してくれると思う、そういう心ができたら油断する。だから、失敗させて育てる。そういう厳しさがなければだめですよ」と対応しましたよ。

**鎌田** 失敗をしても大丈夫なのが学校ですよ。

**有田** そうです。保護者会に1回くらい遅れたって、翌日、「昨日こんな話をしましたよ」と伝えれば済むことですよ。そういったやり方で視写力を鍛えて、10月になったら、今度は聴写力です。今まで黒板に書いていたことを、書かずに口頭で伝えます。

**鎌田** これは難しいですよ。

**有田** 「おたよりノート」というのをいつも持たせて、遠足の途中でも電車の中でも、書かせました。「おたよりノート」で視写力・聴写力を鍛えて、書く力をつける。それと同時に、私の学級経営のもう一つは、「はてな？帳」です。子どもが「はてな？」と思ったことを見つけて書いてくるもので、この二つが車の両輪です。「おたよりノート」には、その日子どもが習った言葉をなるべく使う。そうすると、子どもも「はてな？帳」にその言葉を使って書いてくる。

昭和42年からずっと続けてきたこれらの膨大な記録を、私は今でも保存しています。結婚式によばれると、スピーチでその子の昔の作文を紹介したりしますよ。子どもたちの印象に残る文章というのは、本当によく覚えていますね。

子どもが私に与えてくれたものは大きいと思います。私人間らしくなったのは、子どもから人間らしくしてもらったのではないかと、思いますね。学問というのは勉強すればできるけれども、人間を磨くというのは難しい。人間を一番磨いてくれるものは、やはり子どもだと思う。多様な子どもがいて、こっちは一人、向こうは40人で、それに対応できるようにならないと教師として務まらないわけですから、子どもはまさに、私の先生です。

# 有田和正先生の実践を学ぶ

元 北九州市教育委員会教育次長 こうしろ あきら 神代 明

## 1 お叱りをうけた教育実習

有田先生との出会いは、1969（昭和44）年10月私が福岡教育大学3年生の時、1か月間の附属小倉小学校における教育実習である。附属小の社会科主任Y先生の師範授業後の社会科協議会で、司会をされていた有田先生が「学生の方から質問はありませんか？」と問いかけられた。一瞬静まり返った中で、勇気を振り絞って「先生の授業の中で学習活動2と3の所は、途切れていたように感じました。子どもの意識が連続してないのではないかと思います。」と真っ先に発言した。すかさず、有田先生から「君は何を言ってるのか！授業記録をきちんと取って、子どもの発言や姿を基に話しているか！」と大目玉をくらってしまった。そして、授業記録の取り方、教材、学習活動、子どもの発言や教師の問いかけなどについて、みっちり指導を受けた。この厳しく温かいご指導で大反省するとともに、「いい社会科授業をしたい」という私の実践への大きな動機づけにもなった大事件であった。その後、授業を参観した折には、授業記録を丹念にとるようになり、また、社会科の雑誌や本をかなり読むようになった。本当にありがたいお叱りであったと思う。

実習最終日の反省会では、有田先生が『「ごみ」について、前から取材を重ね、教材としてあたため開発している。3年『市や町のしごと』の単元で実践しようと考えている』と、その教材としての面白さと意義を我々実習生に熱く語ってくださったのが深く印象に残っている。

## 2 「教材開発」の醍醐味を学ぶ

1971年に新採教員になった私は、その年の9月に、有田先生に6年生の歴史学習「明治維新」の授業を参観いただき指導を受ける機会を得た。この時にも、歴史学習における教材研究のあり方や共通問題の設定のあり方、子どもの考えの見取りなど、自身の実践と重ねながら講話いただいた。失礼な発言をした実習生を、その後も温かい声掛けと丁寧なご指導、そして励ましをいただき、有田先生の授業にかける熱い思いと優しい人間味のあるお人柄に一層胸を打たれる思いであった。

1973年に『小学校社会科の授業① 市や町のしごと』

（国土社）が出版されると、すぐに取り寄せ、理論的背景と授業「ごみ学習」の展開を熟読した。教材開発とは、単元を構想するとは、子どもが問題をもつとは、追究するとはこうした姿なのかと大きな衝撃を受けた。先生の詳細な取材をもとに「自らの頭で徹底的に考え抜き、一から綿密に組み立て」られ、子どもに寄り添いながら教材化し、「構想は大胆に、実践は緻密に」なされていることに深く感銘した。

この本の中で共著者の霜田一敏先生は「このように子どもの追求に即して教材が求められ、そして同意されて、正対することができたとき、子どもたちは成長するのである。教師は、教材さがしに労をいってはいけないことを有田氏は絶えずわたくしたちに教えてくれた」と指摘されている言葉が心にずしんと響いた。有田先生のこの実践から、全国の教師が、「教材開発」の醍醐味と重要性を学び、子どもの素晴らしいあくなき追究の姿から強く意識付けられたのではないかなと思う。

## 3 「子どもの側に立つ教材開発」の条件から学ぶ

有田先生は、筑波大学附属小学校へ転勤された後も、北九州市の研究大会、夏季研究集会、研究指定校などへの指導に頻りに足を運んでくださり、長年にわたって講演や授業を公開していただいた。講話では、いつも新しい「子どもたちの興味・関心を引き起こすネタ教材」を通して子どもたちを「追究の鬼」にしていくという授業構想や実践について、ユーモアを交えながら語られ、私たちはいつも魅了されてきた。まさに、先生が子ども以上に「ネタ」教材開発の「追究の鬼」と感じるばかりであった。有田先生のように「教材開発」を行い、子どもの追究力を伸ばしたいという思いにかられ、いつも次への実践意欲を高められたと感じた教師は全国にたくさんいたであろうと思われる。

私が附属小倉小学校に転勤した年の夏季研究集会では、講師として参加された有田先生が、夕食前に温泉につきながら「わたしは、小倉附属に8年いたよ。君は10年いるつもりでじっくり腰を据えて、君らしい社会科の教材開発に取り組んで」と笑顔でありたい励ましをいただいたことが、脳裡に焼き付いている。



有田先生の講話、授業公開、著書等から教材に関して学ぶものが数多くあるが、特に注目したいのは、「教材のねらいとその条件」の考え方である。

先生は著書の中で、次のように述べられている。

教材開発のねらいは、一人ひとりの子どもたちが切実な問題をもって、意欲的に追究する教材をつくり出し、それを組織づけてよりよい「指導計画」をつくり出すことにある。(中略)

子どもの思考をゆさぶるタネやしかけのはいっている教材が「よい教材」で、その要件は、

①子どもの追究意欲を誘うもの

・体当たりできる教材—子どもが切実な問題がもてる教材(個性的思考と衝突する事実)

・子どもが自分なりにめあて・見通しがたち、追究計画がたてられ取り組めるもの

②子どもの追究が、多面的な関連・発展をする教材

③子どもの生き方にかかわり、その子なりの考えが作り出し、人間形成に役立つもの  
ということである。

なかでも、「①子どもの追究意欲を誘う」という要件が大切で、「子どもの側に立つ教材開発」の根本要件であるといえる。

(『子どもの生きる社会科授業の創造』明治図書1982)

子どもにとって魅力的で、意欲的な追究を生み出せる素材で、子どもの社会的な見方・考え方を深めていく学習が成立するように、「指導計画」にまで創り出せたときに、教材開発といえることを示唆されている。そこには、様々な社会的事象に対する教師のきめ細かな取材とそこから「子どもの追究」「生き方に関わる認識」への鋭い見極めが要請されてくることになる。そして、子どもの学びの姿を想定しながら、学習活動、学習過程、さらに発問・板書等を考慮して「指導計画」にまで仕上げていくことで「子どもの側に立った教材開発」になるということを言われているように思う。「ポストづくり」「さとうきび」「野辺山高原の野菜づくり」「宅急便」「柳川」「一寸法師」など、全国の教師に影響を与えた魅力的な教材開発が有田先生によって次々になされてきた。実践においては、授業記録、子どもの感想文やノートなどからその追究の意欲やその子なりの見方やとらえ方を丹念に読み取り、分析し、子どもの成長を温かい目で見つめ、さらに追究が深まるかかわりをしておられることが様々な著書からうかがえる。教師は教材開発とともに、こうした「子どもを見る目」を確かにしながら、実践をすすめていかなければならないことも、先生から学んだ大きなことの一つであり、教師として大切に身に付け継承していかなければならない能力でもあると感じている。

## 4 有田先生の実践と「誘導論」

有田先生の「現場主義」にもとづく精力的な教材開発と子どもを見つめ育てる基盤となる哲学は、私見ではあるが、1947年に上梓され、附属小倉小学校において戦後一貫して実践されてきている「誘導論」という教育論・教授論にあるのではないだろうかと考えている。

常に、子どもを中心に据え、子どもの知的好奇心をゆさぶり、現実生活の課題を鋭く見つめ、追究し、社会を生き抜く力をつけ、自立した存在として育てようとする教育実践はまさに、「誘導論」の主張する教育理念でもある。

「教育は、常に人間の人間に対する現在の関係としてのみ取り上げられるものであろうが、教師は児童に対して彼等の現実諸関連に於ける愛情豊かな仲介者でなければならぬ。教師は未成熟者、未完成者としての児童を教育してやる指導してやるといったような立場に立つのではなく、児童が児童なりに関係づけられ、関係している様々な現実生活の中で、将来立派な成熟者としての位置と秩序と意義を得させるようなものとして作用するものでなくてはならぬのである。われわれは、かかる作用を『誘導』と名づける。」

(『新教育 誘導論』金文堂1947)

誘導論では、子どもの自発性や主体性を重視し、興味・関心を喚起する生活現実から捉えた誘導材料—学習材の質を課題とし、望ましい目標に導く教師の「誘導の技術」が強調されている。

子どもに学び、何よりも子どもの知的好奇心を大切に生活現実の事象を鋭く切り込む教材を重視し、「追究の鬼」を育てていくことを通して、子どもを自立した存在へとかわりをすすめる有田先生の実践は、「誘導論」の実現化の志向性を強く感じるところである。また、「授業は布石の連続である」という方略も、私には「誘導の技術」の具体化に通じるものがあるようにも感じている。

有田先生とのかかわりと教材開発を中心に実践を通して学ぶもの的一端を述べたが、「追究の鬼」を育てる学級づくりや「追究を支える学習技能の高め方」など、まだまだ学び、受け継ぐべきものは数多くあることを強く感じているところである。

社会科教育に偉大な足跡を残され、「ネタ教材」「実践的モデル」など実践への道しるべを示していただき、全国の教師に多大な影響を与えた恩師有田和正先生に心から感謝申し上げます。

ご冥福を心からお祈りします。

# 有田和正実践の今日的意義

## 1 全国の教師のあこがれ—有田和正先生

「先生、それは違うよ！」

「ぼくが考えたのは…」

社会科の授業で次々と発言する3年生の子どもたち。それはまるで教師に論争を挑んでいるかのようだった。担任である有田和正先生は、それらの発言を受け止め、さらにゆさぶり発問を行う…昭和63年の2月に行われた筑波大学附属小学校での研修会での一コマである。

その授業の様子に若手教師だった私は衝撃を受けた。当時、有田学級を参観したいという教師は数多く存在した。その時の授業も教室では入りきらないので、近くの全林野会館で行われた。数百人はいたであろう。それだけではない。多くの教師が有田学級を常時訪問されていた。有田学級は全国の教師にとっての大きな目標であった。

大学に籍を移されてからも、書籍や教育雑誌にご自身の考えを発信されるだけでなく、全国各地に赴き御講演をされていた。教師相手の模擬授業はもちろん、学級を借りての飛び込み授業も積極的にされていた。まさに「授業の名人」であり、教育界において燦然と輝く「巨星」であった。

## 2 斬新な主張の数々

有田先生は授業づくりにおいて、斬新な主張を次々とされた。その魅力的な内容に、「なるほど！自分も取り組んでみたい！」といつも思ったものである。

### ○「材料七分腕三分」の「ネタ」開発

有田先生は、「授業においてどのようなネタ（教材）をもってくるかで授業の70%は決まる」と主張される。「材料七分腕三分」というのはそのキーワードである。例えば、次のようなネタがある。

- ・「さとうきびは東西南北のどちらに曲がっているのか」と問い、台風との関係を考えさせる。

岩手県奥州市常盤小学校副校長 佐藤 正寿 さとう まさとし

・富士山の見えた日数グラフをもとに、「富士山は春夏秋冬のいつがよく見えるか」と問う。

このようなネタを提示すると、子どもたちは夢中になって考え、発言した。社会科を学習するおもしろさを感じていた。

そのネタの資料や発問を有田先生は積極的に公開された。「ネタ開発」をキーワードに、有田実践はどんどんと追試され、広まっていった。さらに、社会科の教材開発も盛んになったのである。

### ○「はてな？」から「追究の鬼」を育てる

有田先生は子どもたちを「追究の鬼」に育てることに力を注いでいた。今も昔も社会科では問題解決能力を育てることが大切であるが、有田学級では一人一人の追究力は抜群であった。

その前提となるのは、好奇心をもって「はてな？」を見つけることができる問題発見力である。面白い教材から、子どもたちから思わず調べたいと思う「はてな？」が生まれる。子どもたちが一生懸命に調べて解決しそうになると、有田先生がまたゆさぶる。そして、新たな「はてな？」が生まれ、また子どもたちの追究が始まる…この繰り返しの中で、「追究の鬼」が生まれていった。

### ○学習技能を育てる—「ノートは思考の作戦基地」

有田先生は学習技能を重視されていた。どのように調べ、それをどのように表現するか。そのような学習技能を、社会科だけではなく全教科の授業を通して指導することの大切さを説いていた。

特に有名なのがノート指導である。有田先生のノート観を端的に表す言葉が、「ノートは思考の作戦基地」である。これほどノート指導の意味づけを表している名言はないであろう。

これらの他にも、発問の定石化、学習内容を構造的にまとめた板書、少ない資料で深く追究させる授業等々、実に多くの主張をされている。それらは、一つ一つが骨太のものであり、どれも一冊

の書籍にまとめられるほどのものであった。

有田先生のこのような主張のエネルギーとなったものは、社会科教育をおおっている固定観念への挑戦だったと推測する。何の工夫もなく提示される教材。子どもたちが意欲を示さない調べ学習。数多くの資料を次々と提示され子どもたちが消化不良となっている授業。宿題の調べ学習が生かされていない事例…このような現状への有田先生独自の問題提起が先の実践群だったのである。それらは当時の教育界への強烈な主張となり、多くの教師に新しい授業観をもたらした。

そして、その授業観は今の教育でも大切な視点となっている。例えば、全国学力・学習状況調査日本一の秋田県では、現在「問いを発する子ども」の育成に力を注いでいる。有田先生がすでに「はてな？」実践で着目していた視点である。「家庭学習との連動の大切さ」という点も、「追究の鬼」を育てる過程で実証済みである。また、ノート指導・発問研究・板書の工夫といった有田先生の一流の指導技術は、若手教師が増えている今、「教師の指導モデル」と言えるであろう。

### 3 子どもを見る目の温かさ

有田先生は、学級づくりも名人であった。

有田学級の子どもたちは底抜けに明るかった。そしてユーモアたっぷりの発言が多かった。これは有田先生の「子ども観」によるところが大きい。

「子どもは本来明るいものである」と有田先生は語っていた。学級が暗い雰囲気であれば、それは教師の責任だとも話していた。だから、有田先生自身が明るくユーモアをもって、子どもたちに接していた。『「一時間に一度も笑いのない授業をした教師は、授業終了後ただちに逮捕する』と学習指導要領に入れたい』と話すぐらい、ユーモアを大切にされていた。

もちろんそれだけではない。授業中での子どもよさは大げさと思えるぐらい褒めていた。「驚くのも教師の大切な仕事」と話され、子どもたちのやる気を喚起していた。「紳士録」というノー

トを教室に準備をして、子どもたち同士で互いのよき行動を書き込ませたこともあった。

日本の子どもたちは外国に比べると自己肯定感が低い、というデータがある。自分に自信がないという子どもたちを、どれだけ学級の中で育てていくかという視点は大切である。有田先生は先のような学級づくりで、一人一人に「自分らしくてよい」という自信をもたせる学級づくりをされていた。自己肯定感が低い今の子どもの学級づくりに必要な視点である。

## 4 教師としての生き方のモデル

有田先生は多くの教師に、授業をすることの楽しさを教えてくださった。「努力と挑戦」をモットーにされ、「自分は授業が上手になりたいのです」と、70歳を越えてからも社会科の授業にチャレンジされていた。

また、有田学級の児童と同じように、全国の先生方を温かく見つめていた。レポートや授業の講評では、その教師のよさを必ず見つけて、「すばらしいね！」と褒めてくださった。

そのような有田先生の生き方や人柄を、多くの教師が慕っていた。私もその一人であり、有田先生との出会いがあったからこそ、価値ある教師生活となった。教師生活20年目に有田先生に自分の社会科授業を参観していただいた感動は、今も自分の教員生活の支えとなっている。

有田先生がお亡くなりになった時、とある校長先生が「日本の社会科には間違いなく『有田時代』があった」と話されていた。まさに一時代を築いた存在が有田先生だった。その生き方は、現在も多くの教師のモデルとなっている。

有田先生から学んだ先生方は、現在それぞれの立場でリーダーになったり、実践を重ねたりしていることであろう。今後はその先生方が、有田先生から学んだことを未来の教育のために伝えていく番である。全国各地にいる同志と共に、有田先生が蒔かれた種を広めていくのが私たちの使命だと思っている。



## ユニバーサルデザイン化する

関西学院初等部副校長 村田 辰明 むらた たつあき

## 授業のユニバーサルデザインとは

授業のユニバーサルデザイン（以下 UD）とは、教科教育と特別支援教育の融合を図り、学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもが、楽しく「わかる・できる」ように工夫・配慮された通常学級における授業のデザインである。

デザインの第一歩は、クラスで気になる子どもを念頭に置くことだ。気になる〇〇君がどう活動しそうか、どう考えそうかを常に念頭に置きながら支援を想定する。ただし、これまでありがちだった、気になる子どもをあらかじめ切り離して考え、他の子とは別に難易度の低い課題を与えたり特別なワークシートを配ったりする個別的配慮から入ることはしない。気になる子どももクラス全体の授業に乗れるように授業そのものを「工夫」することから始める。当然、気になる子どもを念頭に置いて想定した支援が、他の子どもにとっても優しい（易しいではない）かも考える。気になる子どもへの支援が、他の子どもたちにとっても有効なものになることが大切だ。それでも気になる子どもが学習に参加できないときには、個別に「配慮」する。以下、社会科授業を例に、授業のUDについて述べる。

## 社会的見方・考え方とは

社会科授業をUD化する目的は、「すべての子ども」が「社会的見方・考え方」を獲得できるようにすることである。「社会的見方・考え方」とは、さまざまな社会的事象に転移する汎用性の高い概念である。

例えば、さまざまな社会的事象を見るときに使える眼鏡だ。その眼鏡があると世の中の社会的事象の意味が見えてくる。子どもたちの身の回り

にはさまざまな社会的事象が存在している。遠足のおやつを買うスーパーマーケットやCDやビデオのレンタルショップは、身近な経済的事象である。休日に出かける公園や登下校で使用する歩道橋は、政治が影響している事象。正月に初詣をする神社は、まさしく歴史的事象だ。子どもたちは、無数の地理的事象、歴史的事象、政治的事象、経済的事象に囲まれている。そして、それらを無意識のうちに目にし、利用し生活している。

中学年の子どもたちに「スーパーマーケットを知っていますか？」と尋ねると、「よく行くよ。」「〇〇スーパーは安いよ。」「お母さんは安売りの日にまとめ買いするよ。」など、多くの気づきが返ってくる。しかし、それらの気づきは、見たことがある、行ったことがあるというレベルにとどまっていることがほとんどである。スーパーマーケットの品揃えを客との関係から説明できる子どもは多くない。ましてや、販売者が消費者のニーズを徹底的に分析し、商品管理・商品陳列を工夫していることを説明できる子どもは、まずいない。見えているけれど見えていないのである。意味が見えていないのだ。

社会科授業でスーパーマーケットを取り上げたならば、「スーパーマーケットで働いている人たちは、国内外とかわかり、買う人の願いを考えながら売するためのさまざまな工夫を行い、わたしたちの暮らしを支えている。」という見方・考え方を、すべての子どもに定着させなければならない。スーパーマーケットが単なる建物、商品陳列場所、商品購入場所としてではなく、販売者と消費者の願いや意図が重なり合った集合体として見えるようになったとき、スーパーマーケットに対する社会的見方・考え方が身につく、スーパーマーケットの本質の意味を理解したことになる。

さらに、特定の社会的事象に対する見方・考え方は、本質の意味理解を促すとともに、多くの似た社会的事象に転移し、それらの本質の意味理解をも導き出す。スーパーマーケットの学習で「売る人は、お客の好みをしっかり調べて商品を並べ

ている」という見方・考え方を得た子どもなら、自動車産業の多種多様なラインナップと消費者の多様なニーズとをつなげて考えることは十分にありうることである。年間70~105時間の社会科の時間で、子どもの身の回りにある無数の社会的現象のすべてについて具体的に学ぶことはできない。それゆえ、「一学んで十を知る」ことが大切だ。社会的見方・考え方は「一学んで十を知る」ための貴重なツールである。

こうした社会的見方・考え方をすべての子どもに獲得させるためには、社会科授業のUDが有効である。社会科授業をUD化する際にまずポイントとなるのが、①**焦点化** ②**視覚化** ③**共有化**の3つの視点である。

### ポイント① 焦点化

社会科の発問は、基本的に、When Where Who What How Why Whichのいずれかが使われる。UD化したからといって特別な疑問詞が使われるわけではないし、何か一つの疑問詞に絞るわけでもない。違うのは「具体的かつ問口のせまい発問」の使い方だ。社会科の苦手な子どもや発達障害のある子どもには、具体的に考えさせることが必須である。

「どんな工夫をしていますか」「何か気づいたことはありませんか」などは、社会科授業でよく使われる、欠かせない発問である。しかしこれが、社会科の苦手な子どもには難しい。一部の子どもにとっては、思考の方向性すら見えない抵抗感のある発問になる可能性がある。社会科で必要な質問だが、苦手な子どもには難しすぎる発問。実に悩ましい。

例えばこうしたらどうだろう。「スーパーマーケットの人はどんな工夫をして商品を並べていますか」と聞く前に、次のような発問を試みる。「スーパーマーケットの人はペロペロチョコを棚の上中下どこに置くでしょう?」(下)「それはなぜ?」(小さい子のため)「ワインの横に何を置いている?」(チーズ)「チーズが置いてある

のはなぜ?」(まとめて買いやすいから) これらの発問を通じて、子どもは、販売者が客層を意識し買い手の買いやすさを考えて商品を並べていることを学ぶ。この後で、「(ペロペロチョコ等の他に,) スーパーマーケットの人はどんな工夫をして商品を並べていますか」と問う。手も足も出ない子どもはいない。ペロペロチョコやワインとチーズを参考にし、客層、関連商品から商品陳列の工夫を具体的に考えることができるからである。「米は重いので商品棚の下の方におくはず」「お肉売り場にはタレが置かれているはず」などの意見が続く。

社会科では、「どのような工夫をしているか」「○の特徴は何か」など問口の広い抽象的な問いが欠かせない。しかしその前に、まず問口の狭い具体的な発問をしたい。問口の狭い具体的な発問は、すべての子どもの参加を促す。

### ポイント② 視覚化

社会科授業では、グラフ、写真、地図などの視覚的資料が多用される。最近は動画も頻繁に使われる。UD化したからといって、何か特別な資料が登場するわけではない。違うのは資料の「見せ方」だ。例えば、教科書の写真にブラインドをかける。すると子どもは、何も言わなくても資料に集中し隠れているものを予想し始める。資料をアップやルーズにして提示したり、ダウトを入れたりするのも効果的だ。これだけで、どの子もモチベーションが上がる。授業に参加しやすくなる。

だからといって、何でも資料に手を加えればよいというものではない。注意することがある。一つめは、子どもの意識が授業で狙う学習内容に向くように資料を加工することだ。加工する箇所と学習内容は常にセットである。二つめは、加工した資料が複数あるときは、基本的には、易しい資料から難しい資料の順に提示することだ。いきなり難しい資料を提示されると、社会科が苦手な子どもはそれだけで抵抗感を示す。何に注目したらよいのか、どのように考えたらよいのかわから

ないからだ。易しい資料が、難しい資料について考える際の足場になる。

### ポイント③ 共有化

教師は、ぜひ全員に理解してほしい、しっかり受け止めてほしい意見が出たときには、その意見を大切に扱う。「〇〇さんは～ということが言いたいのですね」と意味を再確認したり、強調して板書したりする。そして、全員が理解したと教師は考える。しかし、これだけでは、本当に全員が理解できたか、共有化できたかどうかはわからない。視線は板書にあっても、頭の中は全く別のことを考えている子どもがいるかもしれない。

ある子どもから「クラス全員が共有すべき考え」が出てきたとき、一番よいのは、その意見について全員が自分の考えを述べ、お互いに聞くことだ。しかし、それは無理だ。授業は45分間しかない。そこで有効なのが、ペア学習である。「今、Aさんが話したことをお隣の友だちと説明し合ってください」と指示する。子どもたちは、Aさんの意見に注目せざるを得ない。自分の言葉で説明したり、隣の友だちの再説明を聞いたりすることを通して、重要な意見について理解を深めることができる。そこに空白時間はない。全員が思考することになる。同様に、「今、Aさんがいったようなことが他にもあります。それを隣の人に伝えなさい」「今、Aさんが言ったことが本当に正しいか正しくないかを隣の人と相談しなさい」などと指示することで、人任せにできない状況をつくり、「クラス全員で共有すべき考え」をより確実に全体に浸透させることができる。

ペア学習の他にも、発問後、勘のよい子どもをすぐに指名せず、困っている友だちを「見える化」して、ヒントを出すように促すことも有効だ。ヒントが重なっていく中で、集団としての理解が深まる。授業後半に挙手が増えるのがUD化された社会科授業の特長である。「今から発表する〇〇君が何と言うと思いますか」と、友だちの意見を事前に想像させたり、子どもの発言を途中で止め

て、「〇〇さんは、この後何と言うと思いますか」と、続きを想像させたりするのも、有効な方法だ。

### 授業のUD化は手段である。

#### 具体的な支援は目の前の子どもによって変わる

最近、UD化を図った授業を参観することが増えた。その中に、UD化を意識するあまり、共有化、視覚化、焦点化自体が目的になってしまっている授業がある。子どもの必要感に関係なくペア学習が行われていることもある。これでは本末転倒だ。目的は、全員が楽しく「わかる・できる」ようになることである。UDはあくまで手段であることを肝に銘じておきたい。

授業のUD化を図るとき、教師は「視覚化、焦点化、共有化」などの視点を意識する。そして、その視点から授業で実際に行う具体的支援を想定する。「視点➡具体的支援」の流れだ。ここでも注意したいことがある。視点は、どの教師にもほぼ共通するが、具体的支援はそうではない。同じ「視覚化」でも、ある教師は資料にブラインドをかける手法をとるところを、別の教師は資料をアップにしたりルーズにしたりする手法をとるかもしれない。どのように視覚化するかは、教師によってずいぶん異なる。なぜか。目の前にいる子どもが違うからだ。聴覚的情報が苦手で視覚的情報が欠かせない子どもがクラスにいれば「強め」の視覚化が必要だが、そうでなければ視覚化の程度も変わる。視点はしっかり意識しつつ、具体的支援は目の前の子どもに応じて柔軟に想定する。その点をしっかり踏まえることも大切だ。

社会科授業のUDがめざす「社会的見方・考え方の獲得」は、社会科の授業づくりをする上で当然のことである。しかし、それに「全員」という言葉がセットになった瞬間、授業づくりの難易度は一気に上がる。我々教師には、目の前の子どもの姿を起点とした緻密な工夫や配慮に満ちた授業づくりが求められている。授業のUDは、その方法の一つを提示している。



# 学校の歴史資料室をつくろう大作戦

～横浜市歴史博物館の取り組みから～

横浜市歴史博物館エディター けいとく まさよし  
慶徳 正好

## 1 社会科3年「昔の暮らし」の 単元における学習指導上の課題

- 体験学習（洗濯・七輪）だけに終始していないか。  
（体験学習そのものだけが目的化してしまう）
- 昔は「不便だったね・大変だったね」で終わっていないか。  
（今と昔の目に見える違いのみに終始してしまう）
- 教科書にある古民家や道具だけの話し合いで終わっていないか。  
（目の前の具体的資料をもとにした学びに入らない）

## 2 課題の解決に向けた 横浜市立歴史博物館の取り組み

### 『資料室リニューアル作戦』

➔博物館学芸員や整備スタッフを派遣し、学校内にある歴史資料室を整備し、展示の工夫・改善を図る。

横浜市内の小学校341校の中で、民俗文化財などを展示する歴史資料室をもつ学校は、全18区に79校存在している（平成25年度全校悉皆アンケートによる）。しかし、民具など資料の劣化や運営面の人的不足、児童増に伴う教室確保の困難などから、十分活用されているとはいえない。

今回の『リニューアル作戦』では、博物館職員を計画的に学校に派遣し、資料の洗浄・撮影・記録・注記・保管という工程で作業を進め、展示の工夫・改善を行った。

### 『資料室授業サポート作戦』

➔博物館学芸員やエディターを派遣し、リニューアルされた資料室を活用した授業づくりを支援する。

資料室を活用した社会科指導方法の紹介、民具

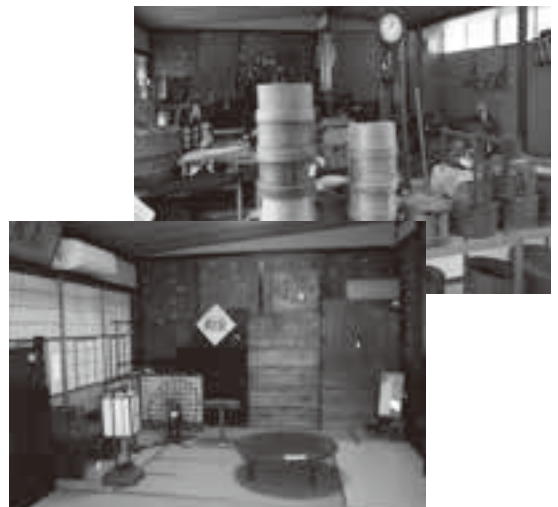
等資料に関する教師向けの研修、博物館職員が資料室に向いての訪問授業、地域の古老を招いての「まちの昔・お話会」、資料室づくりに関する教育実践フォーラムなどを実施し、授業をサポートした。

（本事業は平成25・26年度、地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「学校内歴史資料室を活用した博物館デビュー支援事業」として、文化庁の補助を受け実施している。）

## 3 実践事例

### 『資料室リニューアル作戦』の事例

大道小学校は、地域と学校が協力して『さわれる資料館』を理念とし、資料室のリニューアルに取り組んだ。長い年月にわたって集められた資料は、約2000点にも及んだ。博物館専門職員のアドバイスで、汚れのひどい民具の洗浄（水で表面に付着した泥や埃を洗い落とす作業）、資料の目録の作成、一時保管場所への移動、資料室の展示



▲整備前の資料室（上）とリニューアル後（下）

レイアウトの改善（見学者動線の確保等）、表示看板や解説板の作成などを行った。

リニューアル後は、和室での古老による昔話会や草履づくり昔体験など、数多くのイベントを毎月に行っている。今後は、地域の資料室として小学校の授業での活用促進（資料の貸出し・出前授業）や地域の方々への一般開放を考えている。

### 『資料室授業サポート作戦』の事例

#### ◆ 川和小学校歴史資料室での見学学習

川和小学校歴史資料室は、平成25年度に学校が所蔵する民具等資料約560点の整理が終了し、資料室のない近隣の小学校に対して、見学を受け入れている。限られた見学時間の中で数多くの民具資料について解説することは難しいため、博物館職員による解説を次のように工夫した。



▲博物館職員による解説

○資料室の中にある【食とすまいに関するものさがし】をする。

子どもたちは、釜、おひつ、井戸、やかん、茶碗など食に関する道具やランプ、火鉢、机、いろいろ、糸車など、すまいに関する道具など次々と発見した。

○昔の道具の役割について話し合う。

子どもたちが発見した道具を見ながら、その役割を考え話し合う。（例：いろりは、お湯を沸かすだけでなく、餅や魚を焼くことや部屋を暖めること、ものを乾かすことなどもできた。）

#### ◆ 歴史資料室への訪問授業

担任と授業計画・内容について相談の上、博物館職員による訪問授業を行っている。

茶室と資料室をもっている学校では、家庭科室のアイロンを使ってハンカチのアイロンかけを子どもたちに見せたところで、担任に資料室から炭火アイロンを出してもらった。炭火アイロンを手を持った子どもたちからは「すごく重い、熱くな

いよ、電気のコードがないよ、何で熱くするの」などの感想や疑問が次々に飛び交った。その後、炭火アイロンの蓋をあげ、中に炭を入れる構造の説明をした。また、茶室での授業では、鉄瓶、鉄鍋、網、五徳、火箸などの道具を見せた上で、自在鍵のしくみについて考えることができた。

#### ◆ 歴史資料室での視察活用研修

横浜市歴史博物館では、平成25・26年度に、歴史資料室の視察並びに活用研修を9回実施している（今後の予定も含む）。リニューアルした資料室に学校関係者・地域関係者・博物館関係者などが集まり、視察の観点（くらしの道具と変化や昔の人々の知恵など）をもとに討議する研修である。



▲視察活用研修の様子

#### 視察活用研修での討議内容（一部）

Q. 子どもに紹介したい資料は何か。その訳は。

- 「夏の風物詩である蚊帳を子どもに体験させたい」
- 「蚊帳の中に枕や布団を置いてみたらどうか」
- 「寝てみたら今昔の電気の違いもわかるかもしれない」
- 「資料室の中で実際に触れられると体感できそう」
- 「子ども向けのわかりやすい解説資料が必要だ」
- 「牛乳の入れ物の名称から地域の昔が見えてくる」
- 「昔の学校の写真から着る物の変化が見えてくる」

Q. 子どもにぜひ気づかせたいことは。

- 「道具のしくみから先人たちの知恵を知らせたい」
- 「昔の人がくらしを向上させてきた移り変わりを知らせたい」

## 4 今後に向けての方向性

○資料や資料室のない学校へのサポートの充実  
博物館や学校資料室から民具資料貸し出しや訪問授業が行えるようなシステムをつくる。

○横浜市18区に学校資料室拠点校を配置  
歴史資料室のモデルと成り得る拠点校を区ごとに配置し、さまざまな情報発信をしていく。



第12回

まもなく締め切り!!

# 地球となかよし メッセージ

## 作品募集 (2014年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、  
写真 (またはイラスト) にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に  
参加賞が  
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2014年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会  
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞  
\*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね  
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

**教育出版**

「地球となかよし」事務局 TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回  
入選作品



たんぼぼって、すごい!

おにわに、もうすぐ「わたげ」になりそうな「たんぼぼ」がありました。それを、ままがぬいてしまいました。「かわいそう」とおもって、もうすぐ、わたげになりそうな「たんぼぼ」を、そおとそのまま、げんかんにおいておきました。するとびっくり!! 水をつけていなかったのに、2日ごとに白い大きな「わたげ」になっていました。「たんぼぼ」のつよさにおどろきました。かってきた、花びんのお花は、水につかっていたら、すぐにかれてしまうのに。  
しぜんって、すごいなあとおもいました。わたしも、たんぼぼのように、こまったことがあってもじぶんでなんとかできるつよさをもちたいです。

小学社会通信 まなびと [2014年 秋号] 2014年9月1日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局

印刷: 大日本印刷株式会社

発行: 教育出版株式会社 代表者: 小林一光

発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F  
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F  
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F  
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F  
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F  
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F  
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F  
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室  
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F  
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411